

## 「働き方改革」に騙されてはいけない！

藤原 伸介



2020年の新型コロナウイルスの流行は、歴史に残る大惨事となっています。ただ、初動対応で政府やマスコミが「家にいること」を「のんびり過ごす」にして推奨したのは大失敗だと思います。我々はこのときにこそ、動画編集の技術を習得し、オンライン講義の準備しておくべきでした。うっかり、家でペットの頭をなでながら紅茶を飲むのが正しいようにそそのかされてしまいました。この原稿も書こうと思えば早く書けたのに、結局、編集委員の先生方に迷惑をかけることになってしまい、目下猛省しながら書いております。「ステイホーム」や「ワークライフバランス」という言葉は魅力的ですが、政治家の答弁でもカタカナを使い始めたらゴマカシ開始の合図でしょう。これほどカタカナが反乱するようになったのは、森鷗外や夏目漱石といった明治の文豪が、文化人はカタカナが似合うと私達に刷り込んだからではないでしょうか。

私は6年間、『生物工学会誌』の編集委員長を務めさせていただきましたが、伝えたいことを伝えるには日本語でも英語でもわかりやすい言葉の選択が大切だと感じています。今回、せっきくの機会をいただきましたので、これまでの学会誌編集で感じたことに、自分の生い立ちを散りばめて、述べさせていただきたいと思います。

### 日本の研究者は捨てたものではない！

私は、木野邦器先生（前生物工学会会長、早稲田大学教授）が6年間にわたり『生物工学会誌』の編集委員長を務められたあとを引き継ぐ形で務めました。木野先生からは、押しの重要さをご教授いただき、この姿勢は今日まで活かされております。私の場合、副委員長時代を含めると、実に12年も編集作業をする機会に恵まれました。特集はもちろん、バイオメディアや生物材料インデックス、キャリアデザインなど、ユニークな発想や著名な方の体験を紹介させていただき、日本の研究分野の広さや研究者の熱意に改めて驚かされました。我が国の

研究者は捨てたものではありません。「日本は駄目だ論」を唱える方は、そう考える人が駄目なのだと思います。研究室運営を紹介したキャリアデザイン特別企画「ラボ立ち上げました」では、学生の少ない小さな研究環境でも独創的なテーマで秀逸な論文を出している方がいて、ラボは運営次第だと改めて感じました。私達は成果が出ないことを、学生のせいにしたくなるときがありますが、これは頑張っている学生に対して失礼で、自分のマネジメント能力の乏しさに原因があると思います。『生物工学会誌』のキャリアデザイン企画は新城雅子先生（奈良先端大）の提案で始まったコーナーでしたが、社長シリーズや教授シリーズ（通称、大先生シリーズ）も、事業運営のハラハラ感やバイオ黎明期の苦労話がかかれていて勉強になります。この企画も他の学会誌にない斬新なものだったと思います。今は著名な方も若いときに苦労していたことが行間から読み取れます。今だから書けるのですが、私が原稿をお願いすると固辞される場合も、新城先生がお願いすると即快諾というケースが多々ありました。新城先生の交渉力にはいつも助けられました（ありがとうございます）。この企画も学会サイトからす



ポストドク時代の実験台。ゆとりあるスペースに自分だけの試薬や器具を並べて作業する贅沢（1993年頃、イリノイ大学Chakrabarty研究室にて）。

べてダウンロードできるので、是非お読みください。

もう30年近く前になりますが、イリノイ大学(Ananda Chakrabarty教授)でポストドクをしていたとき、その研究室で使われていたマニュアルが日本語で、それに英語の注釈が書かれていたことに驚きました。学生やスタッフが「ジュニチのマニュアル」と言って宝物にしていたのですが、それは、加藤純一先生(現広島大学教授)の走り書きノートでした。当時、日本人は私だけでしたが、非常に誇らしく感じました。「ジュニチはどんな人だったのか」と聞くと「彼はレジェンドだ。毎日3時間しか寝ない。起きているときは、実験するか、走るか、酒を飲んでいる。」という人物評でした。「2年でトップジャーナルに4報も書いた」と聞き、同じ日本人として、自分も頑張らんといけんああと感じたのを覚えています。Chakrabarty先生とは、毎週土曜日の夕方に他愛もないことを話していたのですが、「仕事は忙しい人に頼まないと駄目だ」というのをよく聞きました。「暇な人をお願いするところくなことはない」のだそうです。私も師の教えに従い、実践しています(ちょうど、この原稿を書いている時、Chakrabarty先生がお亡くなりになりました。親日家で、多くの日本人研究者を育てられた先生のご冥福を心からお祈りしたいと思います)。

### 海外でみじめな経験は貴重

『生物工学会誌』のキャリアデザインのコーナーでは海外で頑張っている人が、たびたび紹介されています。皆さん、研究活動や事業展開の内容を中心に執筆されていましたが、実際、人種差別や民族差別も経験されたと思います。多くの方は言葉や人種の壁を、研究データや企業実績で乗り越えたのだと察します。私もポストドクを始めて一月ほどたったとき、同僚のアメリカ人ポストドクから「おまえは毎朝ラボに来て、ベンチのものを右へ置き、帰るときに左に戻して帰るんだらうな」と言われたことがありましたが、意味がわかりませんでした。要するに、何も考えずに毎日を過ごしているという皮肉を言いたかったのです。英語で反論もできませんし、しばらくすると、あまり会話もしなくなり、孤独感マックスでした。これはいかなあと、最初の報告会でわかりやすい図(ポンチ絵)を作って説明しました。果たしてこの「図いっぱい作戦」は成功し、最初の報告会は無事に終わったのですが、科学は図(データ)が喋ってくれるので助かります。ビジネスではこうはいかないのでしょね。研究室の同僚からも「おもしろかった」と言われました。このときの発表は今でも人生最高のプレゼン

だったと思っています。意外だったのは、周りの人達が一斉に手のひらを返したように親切になって、私の英語をわかろうとしてくれたことです。皮肉を言っていたアメリカ人ポストドクからは「すまんかった」と言われ、交流は今も続いています。このあたり、アメリカ文化のわかりやすいところだと思います。

欧米人はお互いをファーストネームで呼ぼうとしますが、仕事をしている気分がしないのでフジワラとよんでくれるように頼みました。結局「フジジー」で定着しましたが、私の英語は「フジーズイングリッシュ」と笑われ続け、よく真似されました。飲み会では必ずネタになったので相当ひどかったのでしょう。

私がいた1992年頃は日本のバブル崩壊が始まる頃でしたが、反日感情も高かったと思います。構内でも「日本人は、旅行ばかりしている」という会話を何度か耳にしたことがあります。必死に頑張っているポストドクにとって、日本からたんまりとお金をもってくる研究者は目障りだったのだと思います。私も薄給ポストドクだったので、現地の大学院生やポストドクとは仲間意識を持ってました。

当時、私が30歳を過ぎても独身だったので、友人たちが憐れんで、いわゆる合コンをセッティングしてくれたこともありました。たいてい主催者の奥さんが友達を連れてくるのですが、もっともきれいな人は主催者の奥さんで、このあたりの采配は日本と同じでした。

また、イギリスから来ていた客員研究員で、ほとんど実験はしないのに報告会ではいつも見事な発表をする人がいました。「アメリカ人はガツガツとしていて下品だ」と言い、午後に紅茶に誘う典型的な英国人でしたが、ある日、深夜2時に図書館で彼を見かけると、山のように文献を積み、報告会の準備をしていました。努力している姿を見せないのが英国風のかっこよさなのかと感じました。

誌面では紹介できない恥ずかしい経験はいっぱいあります。缶詰の中身が分からず、調理したらドッグフードだったことも楽しい思い出です。またなぜか、台湾の方に間違えられました。名前を伝えない限り日本人として認識されることはありませんでした。中国人、韓国人と言われたこともありません。いつも台湾人でした。ある学会の懇親会で日本人女性から英語で話しかけられ、「台湾のどちらのご出身ですか」と聞かれたときは閉口しました。以来、台湾が第2の故郷のような気がしています。

最近博士課程を終えた方は、日本でポストドクをしてポジションを探す人が多い気がします。特に日本で研究できないわけでもないし、論文も書けるからだと思

ます。ただ、博士学位さえあればTOEICやTOEFLの点数が低くても海外に出られます。人生一度なので、飛び出してみるのも良いと思います。日本で築いたステータスはあまり役に立ちません。逆に日本で、思うように成果がでなくて鬱積している人にはチャンスだと思います。恥ずかしい経験も若いときにしかできませんから。

### 挑戦を恐れてはいけない

博士課程の方で、将来が不安な方は多いと思います。修士課程の方でも博士課程に行ったら仕事がないと、研究をしたくても諦めている人も多いでしょう。もっと自信過剰になってはいかがでしょうか。キャリアデザインのコーナーで、学位取得後に実験補助員になり、一念発起してフランスで博士研究員になり、最終的に公募で日本の大学でパーマメント職についた女性研究者の方の紹介がありました。今では第一線で活躍されています。どうも女性の方が挑戦的な気がします。特にバイオ分野では男性に覇気がなく、挑戦を楽しむ意識が薄れているように感じます。博士学位を取られた方は、間違いなく優等生で、故郷の田舎では名前が知れ渡った秀才でしょう。そのような人が挑戦しないのは、本当に勿体ない！海外に出たり、別の大学に移ったり、色々挑戦された方が良いと思います。ラボを立ち上げたら、まったく新しいテーマを始めてみるのも楽しいですよ。多くの偉人を輩出した薩摩の教えでは、男性評価に序列があって、1番は「何かに挑戦し成功した者」、2番目は「何かに挑戦し失敗した者」、3番目は「自ら挑戦しなかったが、挑戦した人の手助けをした者」だそうです。4番目は「何もしなかった者」で、最後が「何もせず批判だけしている者」だそうです。ポジション探しではやはり公募に出し続けることが重要だと思います。「どうせ駄目だから」とか、「出来レースだし」とか、理由をつけて逃げないで挑み続けましょう。学生の就職活動でも、エントリーシートが通過しなくて困っている方を見ますが、アカデミアのポジション探しも、書類選考を通過し、面接まで到達するのが最初の関門かと思います。私が現職に就く際も公募でした。いろいろな大学に出したのですが、中々書類審査が通過せず、絶望的な気分を味わいました。ただ、なんとなく面接までたどり着くようになってわかったことは、募集先の欲している人材像を分析して書類を用意しないとイケないということです。必ずしも研究志向の高い人を欲している大学ばかりではなく、施設管理や講義だけを求める大学もたくさんあります。就活は「マッチング」だと思います。いったん採用されてしまえばこっ

ちのものです。研究室を持ってしまえば、意識さえあれば研究はできます。講義は職務ですが、せっかく研究室を持てたのなら、空いている時間を作って好き勝手に研究を楽しむと良いと思います。

### 実験経験がないと指導できない

『生物工学会誌』で「生物工学基礎講座 バイオよもやま話」(以下、よもやま話)というコーナーがあります。ダウンロードの件数調査をすると、ものすごいダウンロード数が出る記事があります。ここで珠玉の解説を書いた著者の先生方は、実験で苦労した経験のある方が多く、ご自分の失敗があったからこそ、ポイントを突いた解説が書けたのだと思います。初期の記事は冊子化され、『生物工学よもやま話—実験の基本原則から応用まで—』として刊行されています。冊子化に際しては、原稿をお書きいただいた先生方、特に、刊行のための取りまとめをいただいた岡澤淳司先生(現和文誌編集委員長)をはじめ、当時の編集委員の先生方と事務局職員の西口恭子さんには、改めて感謝申し上げます。

私も学生時代は、論文に面白そうな実験が出ていると闇実験をやっていました。クレノー断片でPCRをやってみたり、廃屋のガラスでシーケンスゲルを作ったり、とても楽しい思い出です。特に、貴重なクレノーを1本使い切って、バンドが見えたときは感動的でした。指導教授の小林泰夫先生(広島大学生物生産学部教授)はもちろん、研究室の先輩方もご存知ないと思います。「誰や、クレノー使いきったんは！」と怒っていた先輩がいましたが、犯人は私です(すみません)。我々の世代の青春は今の分子生物学の技術進歩と同時進行だったので、たいていの実験原理は知っています。この知識はアーカイブにして後世に伝えないとイケないと思います。現在の



生物工学基礎講座刊行記念の打ち上げ風景。2013年頃、よもやまばなしを再編して冊子を刊行しました。先生方、ありがとうございました(2013年12月撮影)。

分子生物学実験はキットのおかげで、中学生でもできるようになっています。怖いのは、キットの組成成分が不明でブラックボックス化されていることです。このため、アルカリ抽出やエタ沈の原理すら知らない学生が多い気がします。実際、WEBサイトからの「プラスミド抽出法」(高木昌宏先生)や「エタノール沈殿の原理」(春木満先生)のダウンロード件数は膨大です。PDFは学会員以外の方も閲覧できるので、実験の原理を「よもやま話」で学ぶ学生さんは多いと思います。「よもやま話」は、編集委員の先生方が内容をチェックして掲載されています。これからも益々充実していくものと期待しています。

余談ですが、ただいま新型コロナウイルスの自粛で、大学へ学生の入構制限が発動されています。先日、急ぎの実験データを得るため、ひとりで実験を行っていました。恥ずかしいほど不器用になっており、アガロースゲルのレーンからサンプルが溢れて閉口しました。日頃、学生に口うるさく注意しているのに、自分が思うように作業ができないのは情けない限りです。パソコンの前に座ってキーボードばかり打っているのではなく、少しでも実験をやり続けることが重要だと痛感しています。

### 教育に逃げてはいけない

大学は教育機関なので、学生にわかりやすい講義を行い優秀な人材を育成することは責務です。ただ、新しい研究で成果を出し続けることに比べて、毎講義、同じ内容で喋っているのは楽な仕事です。私の恩師の小林先生は、1日12時間の実験を求める厳しい方でしたが、研究には貪欲で講義も魅力的でした。当時を振り返っても講義内容は最新のネタで、そのノートは今でも捨てられません。毎年ネタがバージョンアップされるので、単位が取れてもコッソリ聞きに行ったこともありました。皆さんも面白い研究をする先生の講義は、興奮しませんでしたか？私達もいつも最新の話ができるよう、自分たちの知識もアップデートしないとイケないのだと思います。「講義が忙しいから、研究できない」とか言わないで、まず研究を行い、最新知見でワクワクする講義を心がけたいものです。教育に研究が大切だということを、最初に教えてくれたのは故坂口健二先生(坂口フラスコで有名な坂口謹一郎博士のご子息)で、私がイリノイ大学に行く前に勤務していた日本食品化工株式会社での上司でした。ちょうど日本に帰り、阪大で助手をしていた頃、坂口先生からは「教育に逃げないで研究をしていないと面白い授業はできないぞ」と言われました。正鵠を射たアドバイスだったと感じています。

### 飲み会は最後まで付き合わないといけない

私の父親は酒飲みで、酔うとグダグダになっていました。その姿を見て、絶対に酒は飲まない大人になろうと子供心に思いました。ところが、大学で体育会弓道部に入り、その決意は新歓コンパの日に崩れてしまいました。入部してわかったことは、広島大学の弓道部は男子部だったということです。女子学生がいるのは女子弓道部という別組織でした。高校までは柔道部で男臭い世界にいたので、大学に入ったら「わたせせいぞう」のイラストのような青春を送ることを夢見ていました。結局、「男おいどん」の生活になってしまいました。ただ、朝まで語り合いながら飲むというのは楽しかったですね。イリノイ大学で博士研究員をしたあと、大阪大学で助手をする機会をいただいたのですが、そのときの教授が今中忠行先生(当時、大阪大学教授)でした。午後5時からビールを飲みながら研究についてのご指導が始まります。研究以外のご指導はだいたい午後7時頃から始まります。これが非常に勉強になり、政治、文学から女性論まで学ばせていただきました。今中先生の「それ、おもしろいよん！やろうやろう！」のかけ声には随分と自信をいただきました。何事も前向きに取り組む姿勢が重要なのだと思います。この時代には松岡正佳先生(現崇城大学教授)、高木昌宏先生(現生物工学会会長、現北陸先端科学技術大学院大学教授)、森川正章先生(現北海道大学教授)、栗木隆氏(現江崎グリコ)、佐古田久雄氏(現マルカン酢)など、そうそうたる論客の先生方がいて刺激的でした。飲酒すると当然車を運転できなくなるのですが、そういうときは大政健史先生(現大阪大学教授)が、真っ赤なロードスターで仁川合同宿舎(官舎、現在はありません)まで送り届けてくれました。翌朝は同じ官舎の高木陸先生(現北海道大学教授)に本格四駆で大学まで送っていただきました(大政先生、高木先生、ありがとうございました！)。

ところで、学会や研究会では懇親会が必ずあります。最近の若い方は、あまり懇親会に参加しませんが、お酒を飲まなくても絶対に出たほうが良いです。できれば2次会や、その後もついて行くことをお勧めします。「ご一緒させていただいてもよろしいですか。」と言えばたいていは、「いいよ、いいよ」になります。昼間の発表では聞けないホットな内容が聞けます。支払いは大先生がしてくれるので、高い酒を飲んでおくのが良いでしょう。ゴードン会議などの国際学会でも、懇親会のあとの二次会での内容は刺激的ですよ。思いがけない秘密が

ポロツと聞けたりします。いまは新型コロナウイルスのせいで会議がすべてZoomになってしまいました。その後の飲み会がないのは本当に残念です。

### 働き方改革に騙されてはいけない

いま大学では履修単位数制限が課せられて、1年間に49単位までしか履修が認められません。よくもまああのようなくだらない制度を考えたものだと思えます。まさに勉強したい学生の意欲を削ぐ制度です。一方で、「過労死」が社会問題となり、仕事をするのは「悪」だという風潮もあります。我々の仕事は「趣味」の延長のようなもので、この機会が与えられるのはありがたいことだと思います。ワークライフバランスなど、気にしなくても良いでしょう。むしろ、成果も出ないのに休んでばかりいて、誰が責任をとってくれるのでしょうか。成果が出たときの一杯は格別ですが、結果が出ないときのやけ酒はろくな翌朝を迎えません。北大の森川正章先生の研究室を訪れたとき、壁に「幸運は準備された心に訪れる」という言葉が掲げられていました。森川先生は敬虔なクリスチャンなので聖書の言葉かと思ったら、パストールの言葉だそうです。努力をした人に幸運は訪れるという意味とのことでした。あのフランスでさえこうなのです。日本人は働きすぎだと言われますが、本当にそうでしょうか？世界中の国々が寄ってたかって、日本人をぐうたらにしようとしているのが、「働き方改革」の実体なのではないかと危惧します。私達は「働き方改革」に騙されてはいけないのです。

### 生物工学会誌はそのままゴミ箱に捨ててはいけない

学会誌を冊子体で配布する学会が減ってきました。『生物工学会誌』も園元謙二先生が会長の時代に、冊子体継続を主張され、今日まで毎月配布が続いています。『生化学会誌』や『化学と生物』は完全電子化となり、目を通す機会が減ったように感じますが、このときの英断で『生物工学会誌』は結構読まれているように思います。ただ、冊子体もいつまで続くかわかりません。いま、開封もしないでゴミ箱直行にしている人がいるかもしれませんが、せめて目次だけでも見ていただきたいと思います。このチラ見が結構良い情報を得るきっかけになります。研究費や公募情報もあります。これまで紹介してきたように『生物工学会誌』は他学会の会誌にない内容が盛り沢山です。刊行作業は毎月大変です。岡澤先生(委員長)、長森英二先生(副委員長)の裏とり点検も神経を使いますが、何が一番大変かというと原稿の取り立てです。編集委員の先生方からの「お願い」が通じなくなると事務局からの催促が届きます。以前、学会事務局には片山千代子さんという名物職員がいらっしゃいました。著名な先生方を巧妙に書く気にさせる天才でした。それまで不機嫌だった先生を、コロコロ転がして笑顔で執筆するように導けるのは片山さんの他にはいないでしょう。その後和文誌は、西口恭子さんを経て、現在は柏木歌織さんが編集業務を担当されています。柏木さんは片山さんの再来かと思うほど原稿回収能力が高く、リマインドメールの出し方も絶妙です。皆さんもやがて経験すると思いますが、原稿依頼が届いたら逃げられませんよ。

<略歴> 1990年 広島大学大学院生物圏科学研究科博士課程単位取得退学、日本食品化工株式会社、イリノイ大学シカゴ校博士研究員、大阪大学助手、助教授を経て現職。  
2012年～2018年 本学会理事(生物工学会誌担当) 学術博士  
<趣味> 野菜栽培